

平衡機能検査における臨床検査技師の関わり

◎佐藤 由佳¹⁾、太田 早菜¹⁾
春日井市民病院¹⁾

【はじめに】

めまいの原因疾患は多岐にわたる。正確な診断のためには平衡機能検査が必要である。当院では臨床検査技師が耳鼻科に常駐して平衡機能検査を行っている。平衡機能検査の中には、純音聴力検査、シェロング起立試験、重心動揺検査、温度刺激検査などがある。そのうち重心動揺検査は、患者に低侵襲で行う事が可能であり検査時間も短く簡単に検査を行え、めまい・平衡障害の客観的把握に有用な検査である。当院では、温度刺激検査を行う際に冷水を使用しているが、臨床検査技師は行う事ができないため、医師が外耳道へ冷水を注入し検査を行っている。しかし、冷風を使用した温度刺激検査は、医師の指導の下、臨床検査技師が行うことが可能である。温度刺激検査は一侧の半規管機能検査として有用で、左右別々の病巣局在診断ができる検査である。

今回、温度刺激検査を冷水（カロリック）から冷風（エアカロリック）に変更し臨床検査技師が検査に携わるようになったため、耳鼻科検査の取り組みを併せて報告する。

【当院での検査の流れ】

めまいで外来受診された患者さんは、診察前に聴力検査室で標準純音聴力検査を行う。その後診察室で医師による問診と体位変換などによる眼振の検査を行う。必要な方に後日、重心動揺検査、シェロング起立試験、温度刺激検査を行う。検査は月曜日の午後の特殊外来時に行っている。

【検査手順】

検査機器はFAC-700を使用する。特殊外来受診時に、聴力検査室で重心動揺検査を行う。その後に、看護師が処置室にてシェロング起立試験を行う。機器は電源を入れてから設定の温度まで下がるには約10分かかるため、その間にエアカロリック試験の準備を行う。耳鏡、フィレンツェル眼鏡、ストップウォッチ等の備品を用意する。

【検査方法】

一方の耳から冷風を当て眼振が落ち着くまでの時間を測定する。眼振が完全に無くなるまで時間をおいた後に、反対の耳を検査する。その後同様に眼振が完全に無くなり、めまいや嘔気が消退したことを被検者に確認するまでベッドで安静にしてもらう。その間に結果の入力を行う。入力画面は数値を入力すると自動的にCI値が計算されるようにレイアウトしてあり電子カルテに結果が反映される。

【考察】

冷水で温度刺激試験を行っていた際は、準備の際に温度が変動しないように調整が必要だった。また患者の耳に直接冷水を入れるため、水の処理と濡れた患者の耳の処置を行う必要があった。しかし、今回導入したエアカロリックは、温度が一定であり、冷風による刺激時間も機器で設定されているため誤差がなくなった。また、看護師または医師どちらかの協力を得て検査技師が検査に携わることが出来た。

【今後の課題】

冷風を外耳道に適切に送り込む必要がある。そのため耳鏡を使用する。また、準備してから検査までの時間がかかり機器が結露を起こしたことがある。機器の電源を入れるタイミングに注意が必要である。シェロング起立試験は看護師が行っているため、看護師の業務が立て込んでいると患者を待たせることになる。タスク・シフトの一貫として今後はシェロング起立試験を臨床検査技師が行えるようになれば重心動揺検査から温度刺激試験までがスムーズに行えると思われる。

連絡先：0568-57-0057